田宮虎彦論

山崎行雄

Yamazaki Yukio

オリジン出版センター

宮虎彦論

山崎行雄

オリジン出版センター

著者略歴

山崎　行雄

1945年9月28日，横浜生れ。法政大学文学部日本文学科卒。田宮虎彦研究のほかに，「吉行淳之介の反俗」(『虹鱒』5号1980年3月）など多数ある。
元・神奈川県立高校国語科教諭。現在は創作に専念。
日本社会文学会会員。雑誌『社会文学』編集委員。『新人』『牧歌』同人。『蒼艸』主宰。

現住所・〒222 横浜市港北区小机町1549

田宮虎彦論

1991年2月15日　発行　　定価 3,420円（本体 3,320円）

著　者　山崎行雄

発行者　武内辰郎

発行所　(株) オリジン出版センター

東京都新宿区岩戸町16　メジャー神楽坂402
電話 (03) 3260—0453
振替　東京 0—44705

装　幀　ローテ・リニエ

印　刷　(株) ケイ エム エス

落丁本・乱丁本はお取り替えします

序にかえて

青山光二

一昨年、四月九日に田宮虎彦が自殺し、十二日に代々幡斎場で〝お別れの会〟があったとき、参列するために山崎行雄君の乗ったタクシーがどこかを通ると、桜の花が満開だったという。そしてそのとき彼は、今後春が来ても花を見ることはないだろうと思ったと、たしか書いていた。それくらい彼は田宮虎彦に入れこんでいた。入れこんでいたから、田宮が悲惨な死を遂げた後のこの世で、せめて花見を自己に禁ずるくらいのことはしたいと、実は容易にひとに泛ばぬ決意が、さりげないふうに彼を襲ったのだ。

研究者として一人の作家にこれほど入れこんだ山崎君の永年にわたる労作『田宮虎彦論』が、余人のかれこれ口をはさむ余地などあり得ぬほど、申し分ない出来栄えなのは当然である。充実し、行きとどいていることにおいても抜群であり、とりわけ詳細をきわめた年譜は圧巻だ。

学生時代からの友というだけでなく、同人雑誌の苦労も共にした親しい仲間でありながら、田宮虎彦の小説家としての実像を、山崎君の研究報告によって私は、はじめて知ることができたのだった。作品は、その都度たいていは読んでいたつもりだが、読むことによって田宮虎彦の作風への理解がそれだけ深まるというだけの読み方しかしていなかったという気がする。

地味で、どちらかといえば古風で、作風としては保守的な作家というイメージのあった田宮が、

実は真の意味で〝戦後の作家〟であったことを、システマティックにその筋道を示すことによって気づかせてくれたのも、山崎君のこの論説である。戦後早々の力作「霧の中」も、それにつづく「足摺岬」「菊坂」「絵本」等の連作も、戦前の日本の封建的な生活のなかで苦悩する庶民の姿を、軍国主義や家父長制への批判をこめて描いている。そのような、いわば天皇制下の日本社会への批判はおろか、それをあからさまに描くことすら、敗戦まで、われわれには許されなかった。「霧の中」に関連して、「戦時中から天皇制反対をやった人間を書いてみたいという気持があった」と、ある場所に田宮は書いているが、つまり彼は解放をともなった戦後という時代がくるのを待っていたのであろう。

敗北ということの極致を描いた「落城」についても、戊辰戦争を描きながら、じっさいには存在しなかった黒菅藩というものを作者が設定しなければならなかった所以を、山崎君は明晰に解きあかす。

田宮虎彦が戦前の体制を批判する姿勢の根源には、自身を疎外し虐待する実の父を憎む心情があったという指摘もするどい。そして、天皇制国家が家父長制を支えたとするのだ。

私は旧制第三高等学校で田宮虎彦と同学年の、おなじ文科甲類の生徒だった。ともに学生生活の哀歓のなかにあって、いつか二人で文学の門を潜ったといっていい間柄である。昭和五、六年というその頃、英語を第一外国語とする文科甲類の八十名の生徒の大半は官僚や法律経済専門家志望で、文学部へ進学しようと考えている者はごくわずかだった。田宮と私はそのわずかな生徒のなかの二人だったが、もう一人、のちに『女の一生』の作者となる森本薫がいて、文科甲類出身で物書きに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

なったのは以上三人だけである。

「日本には小説の伝統がない」と田宮が語ったということを、これも山崎君の書きものによって知り、少々意外だった。同時に、鷗外などの影響もありそうな田宮虎彦にしてこの言ありとは愉快に思えた。日本に小説の伝統がないという認識は私も早くから持っていて、だからかどうか、日本の作家の誰かから影響をうけたという意識も、私にはまったくない。田宮がスタンダールやダビの愛読者であることは山崎君も書いているが、彼にしても私にしても、文学における教養はすべて外国文学からうけたものだといっていいのではないか。

そういえば原久一郎訳のトルストイ全集を彼も私もそろえていて、競争するようにして読んだ時期があった。昭和八年から九年にかけての頃である。ドストエフスキー、チェホフと、その頃の読書範囲の基本には共通の部分が多かった記憶がある。

田宮虎彦の庶民的リアリズムとよばれたりする文体は、おおよそ彼の本来のものだが、『日暦』『人民文庫』の同人として習作的（作品系列ぜんたいを後になって検討すれば――の意味）作品を営々と書きついでいた時期に、そのような文体はさらに鍛えあげられて強靱なものとなったと私は考えている。〝人民文庫リアリズム〟だとからかうと、当時、彼は笑って、しかしあえて否定はしなかったものだ。

昭和二十二年、『世界文化』に発表した「霧の中」が出世作となったと年譜に書かれているが、その通りである。同世代の作家がこぞって絶讃し、私は、敗戦を境とした田宮虎彦の変貌に驚嘆した。

「霧の中」「落城」のあと、「足摺岬」「菊坂」等の力作・佳作をつぎつぎと発表して、いわゆる花形作家となる時期がつづくのだが、この頃の彼には、以前にはなかった確乎とした自恃の想いがそなわっていたと思う。阿佐ヶ谷の田宮の家の近くに住むある作家が、急に必要が生じてサルトルの著作を借りようと田宮を訪ねたところ、「ぼくはサルトルを読みません」と、にべもない挨拶だったときいたことがあるが、戦後の作家の誰もが競って読んだサルトルを、何か期するところあってか手にとらないという辺りに、私は田宮虎彦の自恃をまざまざと感じたものだった。

田宮の自殺はそれから四十年ばかりも後のことだが、心の底によほどの自恃がなければ、やはり自殺はできないのではないだろうか。私はそう思い、これも私の喪失感を宥める一つのファクターとなっている。

この書の出版を契機に、山崎行雄君の今後の活躍がいやが上にもみのり多いものとならんことを祈ってやまない。

一九九〇年十二月

田宮虎彦論——目　次

序にかえて……青山　光二……1
田宮虎彦論……9
記載した主な人々
青山光二／芥川龍之介／石光葆／井上靖／猪野謙二／江藤淳／大河内昭爾／奥野健男／川端康成／河盛好蔵／上林暁／草間平作／桑原武夫／幸徳伝次郎／紅野敏郎／坂口安吾／志賀直哉／渋川驍／城山三郎／進藤純孝／杉浦明平／瀬沼茂樹／高見順／武田繁太郎／武田泰淳／武田麟太郎／立原道造／田宮鹿衛／田宮昂之／田宮千代／徳田秋声／豊田穣／中野好夫／中山義秀／夏目漱石／西田勝／丹羽文雄／野坂昭如／服部之総／花森安治／林芙美子／樋口一葉／丸山薫／三島由紀夫／森鷗外／森本薫／安岡章太郎／矢田津世子／山田一郎／山本修二／山本大／吉行淳之介／和田芳恵
晩年の田宮虎彦……276
田宮虎彦と天皇制……284
年譜……305
あとがき……348

田宮虎彦論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

田宮虎彦論

一

「田宮先生の印象」という二十枚足らずの短文を、かつて書いたことがある。

私が大学二年の頃で、卒業した高等学校の文芸部雑誌に載せて頂き、後に私の粗末な第一短篇集『バス停から』（一九七四年　牧歌の会刊）に収録した。

それは、高校二年の秋、当時、吉祥寺にあった田宮虎彦氏のお宅（この稿執筆時の氏のお住まいは、北青山であった。）へ、不意にお訪ねしたときのこと、その後、二度目にお訪ねしたときのことを書いたのである。学生服姿の一文学少年にすぎない私が紹介状も持たず、著名な小説家宅へ訪ねて行くこと自体、非常識なことだが、私なりに悩むことがあって、当時、一等心酔していた田宮虎彦氏を訪ねたのである。そして、二度目の訪問はその二年後、大学受験に失敗した浪人中であった。このとき、何の用事か、はっきりしない。氏は、ご多忙であったろうに、誠実に応待して下さった。

そうした始終を、事実そのままに書いた。

その文章の末尾に、次のように書いている。

仮りに将来、私が田宮文学からはなれ、否定しはじめたとしても、私の脊髄には田宮文学が深くしみついている。田宮文学を語ることは、私自身を語ることなのだ。私はやはり、田宮文学から出発しなければならないだろう。

私と先生との交際は、最近とぎれているが、このままで終るはずがない。今、私が田宮先生のことを書くのは早いかもしれないが、やはり書いておかねばならぬことである。

二十歳の頃の文章であり、それ以後、長い時間が経っている。

文学青年の書いたこの文章を今、顧みるとき、一つの予想ははずれ、もう一つの予想は当った、と懐しく考える。

「仮りに将来、私が田宮文学からはなれ、否定しはじめたとしても」という予想は、微妙な変遷はあったが、幸いなことにはずれた。

また、「私と先生との交際は、最近とぎれているが、このままで終るはずがない」と書いたあの当時は、むろんその先、氏とお会いできる機会があるか分らず、予想にしかすぎなかったが、何年かの空白を経て、再びお会いし、今まで何度か青山のお宅を訪ねている。氏から電話が来ることもある。

現在の私は、高校生のときのように田宮文学を耽読し、乏しい小遣いを持って、古本屋を回って氏の著作ばかりを捜していた情熱はなくなったが、書棚の一画を占めている氏の本を時おり、無造作に取り出し読み始めると、「文学のふるさと」へ戻ったような懐しい平穏な気持になるのである。

私が卒業した大学は、どちらかというと進歩主義の方に属しており、また、大学二年のときは、七〇年安保に当っていた。三島由紀夫が大学の近く、市ケ谷で自殺したのもこの年である。東大紛争、日大紛争などの大学改革を契機として、全国の大学で起った学生運動も、翌年からしだいに退潮し、末期的状況に入っていた。内ゲバ、リンチ殺人、爆弾闘争など、すぐそばの日常的な出来事だった。

私は傍観者だったが、学生委員などして、自分なりに、「政治と文学」の問題を考えざるを得なかった。

その頃、あれほど高校生の私の心を摑んだ田宮文学との距離は、複雑に揺れ動いた。氏の文学には、ある意味で「政治」がある。しかし、「庶民的リアリズム」によるその「政治」は、七〇年代の進歩的立場の文学者の思想や、学生運動家の革命理論とは、相容れない。

『若い日の思索』（一九六七年刊、旺文社新書）も穏健すぎて、心を打つものは少なかった。

『文学問答』（一九五六年　近代生活社刊）に収められている講和条約前後の「政治」への発言も、「庶民的正義観」のように思い、また、「文学的領域」は「政治的領域」を包含するという主張（「文学者の政治的発言」『毎日新聞』一九五四年六月一七日）には賛成だが、しかし、氏の作品は、苛酷な現実を強靱な忍耐力で堪える人物を感動的には描くが、その状況を変革しようとする意志に欠けているように思った。

つまり、『霧の中』（一九四七年一一月『世界文化』）の主人公、中山荘十郎、戊辰戦争で孤児となり、烈しい反抗心を持ち続け太平洋戦争敗戦まで生きる人物だが、彼が庶民であるが故に（気質的には武

士であるが）具体的に国家権力の何へ反抗したのか曖昧であり、それ故、霧の中なのであるが、反権力の市井の人物のある典型を見事に描ききったとしても、物足らなく思った。荘十郎は仇である国家権力に対して一矢も報いていない。

そういう書生的発想を越えられるようになるまで、何年かかかった。

それは、高校生の頃に田宮文学に密着しすぎていた反動でもあったのかもしれぬ。いくら作品に深く共感した処で、本質的には、先生は先生であり、私は私のはずである。そうでなければ、私の存在自体も不必要になってしまう。私は、距離の設定を間違えていたのであろう。

「私が文学の世界に入った門といえば、芥川龍之介が作ってくれた門であるといってよい」（「私の読書遍歴」『日本読書新聞』一九五三年五月一一日）と氏は書いておられるが、私にとっての文学入門は、田宮文学であった。いわば、文学上の「初恋」であった。

それは否定できない事実である。

二

一九八四年、東横線沿線の古本屋を何軒か回ったとき、「新潮社版・日本文学全集六五『田宮虎彦集』」（一九六二年六月二〇日刊）を偶然、見つけ、懐しい思いで購入した。

赤い箱入りで、上はクリーム色、下は薄い灰色の布の表紙。定価二九〇円。解説は、河盛好蔵氏。

私は高等学校の図書室の一画に並んでいたその全集で、はじめて田宮文学に触れたのである。高校一年のときである。その全集で、徳田秋声、近松秋江、武田麟太郎、織田作之助、坂口安吾など

の作家を知った。大変お世話になった全集である。

高校一年のある日、図書室でなにげなく『田宮虎彦集』を借りたが、読んでいるうち、叙情的なそれらの作品に、私の心臓がわしづかみされるような強烈な感動を受けた。人間の悲しいところ、弱いところを田宮文学は、まことの同情をもって美しく描いている。その本を手離せなくなった。一週間が貸し出しの期限なので、一応返却し、また借り出すということを繰り返し、図書カードに私の名が三つ四つと並んだ。それでも物足らず、学校からの帰途、街の本屋で捜して買い求めた。しかし、数年の間、幾度も読むうち、表紙の布は汚れ、糊・糸で綴じられた背の部分がバラバラになってしまい、しかたなく、不要な原稿とともに焼却した。

その本を再び手に入れたのである。解説の河盛好蔵氏にも、前に教えられたことが多かったが、今読んでも懐しい。作品鑑賞の深さと暖かさにおいて、すぐれた「田宮虎彦論」となっている。

その集には「かるたの記憶」（一九四六年）から「小さな赤い花」（一九六一年）までの短篇二〇篇が収められているが、田宮文学の中期までの代表作ほぼ全部が収録されている、といってよい。

私は、最初に載っている「かるたの記憶」を読んで強く惹きつけられたのだろうが、大学卒業直後、お会いした吉行淳之介氏は、若いとき、「かるたの記憶」を読んで感心したことがある、とおっしゃられた。

また、豊田穣氏は『文芸春秋　臨時増刊　日本の作家一〇〇人』（一九七一年一二月）の「近代日本文学においてもっとも影響をうけた小説」というアンケートに対して、「霧の中」をあげている。

さらに、進藤純孝氏の文章（新潮日本文学22『田宮虎彦集』解説　一九八〇年一一月一五日刊）は、ソビ

エトの田宮文学愛読者の存在を紹介している。

流行作家ではないのでその数は少ないかもしれないが、田宮文学の着実な愛読者は思いがけぬところにいるのである。もちろん、近代文学のなかで一流であるのだから当然ではあるのだが……。

ところで、冒頭に書いたように、二度目にお訪ねした浪人中（一九六八年）の後、氏にお会いできる機会があるとは正直な処、思っていなかった。

訪ねる用事もないだろうし、氏は文芸年鑑に電話番号を載せないほど、孤立した生活をなされていた。二人のご子息は結婚して、ドイツに長期留学をしていた。お住まいも吉祥寺から青山へ転居されていた。

しかし、私が氏のお宅の電話番号を知っていたのは、どういう訳だろう。東京の電々公社の番号案内にきいても、電話帳にも記載されていない、との返事だった。

毎年、私は氏に年賀状を出し、そのご返事は頂いていたが、それは、

「献春　――　年　元旦」

と、力強く大きいペン字で直筆（じきひつ）で書かれ、その左に活字で、

「御健勝にお過ごしの御事とおよろこび申し上げます。

いつも御無沙汰にうちすぎ、失礼いたしております。」

そして、活字による氏の名と住所。

それは、毎年、同じ形式の私製の葉書であった。

思うに氏は、何年分かの葉書を印刷し、使用していたのであろう。そこに、ご返事は必ず書かれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.